

(別紙様式3)

平成31年3月30日

## 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 札幌市中央区北3条西7丁目  
管理機関名 北海道教育委員会  
代表者名 佐藤嘉大 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

平成30年4月3日（契約締結日）～平成31年3月30日

#### 2 指定校名

学校名 北海道登別明日中等教育学校

学校長名 岩田一郎

#### 3 研究開発名

AKB Future Project 『世界の明日を創る』

～未来のグローバル・リーダーの育成～

#### 4 研究開発概要

本校は、世界に羽ばたき、新たな時代を築く有為な人材の育成を目指し、国際理解教育・外国語教育を重視するとともに、多様な体験活動を実施している。今後は、これまでの国際理解教育等の教育活動を基盤として、グローバル・リーダーとして求められる資質能力である「国際的な対話力」、「課題解決力」、「情報発信力」を育成するとともに、地域（北海道）や世界の食料問題についての探究型学習に取り組むことにより、経済や環境、地域振興など多面的・多角的な分野・領域から物事を考察する力を育成する。加えて、5年間の指定期間で、世界の5大陸を海外研修で訪問し、フィールドワーク（調査研究等）やディスカッション・交流活動等を実施することにより、日本人としての自覚（アイデンティティ）や誇りを持つとともに、国際的視野を広げ、将来、国際的に活躍し貢献しようとする人材の育成を図る。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程 (平成30年4月1日～31年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
管理機関による指導・助言						○				○	○	

(2) 実績の説明

- ・ 9月12日(水) 第1回SGH運営指導委員会における指導・助言
- ・ 1月24日(木) 第2回SGH運営指導委員会における指導・助言
- ・ 2月1日(金) 平成30年度北海道SGH高校生ミーティングの開催(8校45人参加)

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (平成29年4月1日～30年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
課題研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
海外研修									○			
海外フィールドワーク							○					
食料問題に関する講演やワークショップ等			○	○	○	○	○					
異文化理解に関するセミナー	○							○		○		
留学生との英語キャンプ				○								
グローバル企業でのジョブシャドウイング								○				
地域フィールドワーク			○	○	○	○	○					
ルーブリックの研究開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

(2) 実績の説明

■課題研究

1 目的

- ・ 地域(北海道)や世界の食料問題をテーマとして取り上げ、少人数グループによる探究型学習に取り組むことにより、生徒の批判的・論理的思考力などを高めるとともに、よりよく問題を解決する力を養う。

2 指導体制

- ・ 1グループ4～5名で編成し、校長を含め全教員が指導に当たり、取組の方向性などをアドバイスする。

3 実施状況

- ・ 4月下旬 オリエンテーション, 情報リテラシーについて知る(4回生)
- ・ 6月～10月 課題研究に係る講演・ワークショップ(4, 5回生別)
- ・ 6月～1月下旬 計画書提出, アドバイザーによる指導・助言, 探究学習, 中間発表会, 集中講義①②③

- ・ 6月22日(金) 4回生地域フィールドワーク (酪農学園大学)
- ・ 6月29日(金) 5回生中間発表会
- ・ 6月～10月 地域フィールドワーク期間 (4, 5回生)
- ・ 11月8日(木) 4・5回生合同ミニ報告会
- ・ 1月24日(木) 最終発表会 (ポスターセッション形式)
- ・ 3月9日(土) S G H成果発表会

■海外研修・海外フィールドワーク

取組	日程	生徒	訪問先	目的	内容等
海外研修	11月30日(金)～12月5日(水)	5回生74名	アメリカ・カナダ	・ホームステイや研修等を通じ国際的視野を広げる。 ・国際社会に生きる日本人の自覚を育成する。 ・異文化を理解し尊重する態度や異なる文化をもつ人々と協調して生きようとする態度を育成する。	・姉妹校で日本文化のプレゼンテーション ・滞在先等での食などに関するリサーチ ・ワシントン大学での課題研究に係るプレゼンテーション及びディスカッション
海外フィールドワーク(オーストラリア)	10月9日(火)～10月19日(金)	4名(希望者から選抜された4回生)	オーストラリア コフスハーバー	・農場等を訪問し、食料事情や日本との関係について理解を深める。 ・現地高校生との意見交換を通じ、互いの文化を理解し国際的視野を広げる。	・現地高校生との交流や意見交換 ・農場でのフィールドワーク ・サザンクロス大学訪問(学生との意見交換)
海外フィールドワーク(タンザニア)	10月20日(土)～10月29日(月)	3名(希望者から選抜された5回生)	タンザニア ダルエスサラーム、モロゴロ、ドドマ	・農場等を訪問し、大規模農場の経営実態、食料事情や日本との関係を調査研究する。 ・現地高校生との意見交換を通じ、互いの文化を理解し国際的視野を広げる。	・農場でのフィールドワーク ・現地高校生との交流や意見交換(食文化や農業について等)

■食料問題やT P Pに関する講演・ワークショップ等

日時・対象	演題	講師	内容
6月11日(月) 5～6校時(4回生 77名)	北海道の農業の現状と課題～この地を食の王国にするために	北海道農政課農政政策調整担当課長 野口 正浩 氏	北海道農業の特徴や歴史、我が国の農業に関する現状と課題 など
7月13日(金) 5～6校時(4回生 77名)	グアテマラを通して世界を知る	青年海外協力隊OB 小越 剛 氏	南米グアテマラの食料事情や社会事情、海外ボランティアで必要なこと など
8月22日(水) 5～6校時(4回生 77名)	日本・世界経済の現状－グローバル人材の重要性と国際社会で求められるカー	日本貿易振興機構地域統括センター長 白石 薫 氏	日本の貿易構造の変化、北海道の食や観光に関する潜在能力の高さ など
9月14日(金) 3～4校時(4回生 77名)	これからの農業・食料・北海道－グローバル化・地域社会－	帯広畜産大学 教授 仙北谷 康 氏	農業に関する政策の移り変わり、食料自給はどうあるべきか など
9月14日(金) 5～6校時(5回生 74名) 集約講演	食品ロスの現状と対策	北海道農政課食品政策課 主幹 堀田 貴明 氏	
	人体に必要な栄養とその効果的な摂取	天使大学 教授 山口 敦子 氏	
	北海道農業の現状とその課題→ビジネスを学ぶ	帯広畜産大学 教授 仙北谷 康 氏	
	日本と北海道の漁業資源	北海道漁連室蘭支店 主任 小川 仁 氏	
	みんなが幸せになる農業経営	JA北海道中央会 営農指導課 高柳 泰斗 氏	

■異文化理解に関するセミナー

日時	生徒	取組	講師(訪問者)	内容
4月27日(金)	4～6回生全員	講演	駐日デンマーク王国大使 フレディ・スヴェイネ 氏	デンマーク王国の特徴や日本との関わりについて英語で講演
7月8日(日)	1～6回生希望者	異文化交流	室蘭工業大学留学生4名(4か国)	言語や文化等についての交流
7月11日(水)	5回生74名	セミナー	F A O駐日連絡事務所 所長 ムブリ・チャールズ・ボリコ 氏	国連食料農業機関(F A O)について、国際機関で働くことの意義

7月19日(木)	4～5回生全員	セミナー	北海道大学 大学院薬学研究院 アグスティヌス・R・ウリア博士	インドネシアの多様性に富んだ自然環境や、研究者としての経歴と研究内容を英語で講演
1月31日(木)	4回生	講演	北海道日伯協会会長 道下智義 氏	グローバル・リーダーに必要な資質について

■テレビ会議での海外高校生との意見交換

- ・期 間 6月～11月 3～5回生対象 全18回（4回生は全員，3・5回生は希望者）
- ・交流校 Armidale High School（オーストラリア）
- ・内 容 英語の授業を活用し，あらかじめテーマを決めたディスカッション等の実施

■留学生との英語キャンプ（ニセコ町）※室蘭工業大学の4か国の留学生4名が運営者として参加

- ・実施日 7月26日（木）～7月28日（土）
- ・参加者 18名（4回生17名，5回生1名）
- ・内 容 グループディスカッション，グリーンファーム研修，プレゼンテーション\*使用言語はすべて英語

■大学との連携による地域フィールドワーク（酪農学園大学）

- ・実施日 6月22日（金） 4回生77名
- ・内 容 テーマごとに分かれ「研究課題」，「仮説」，「研究手法」についてワークショップ形式で学習

■グローバル企業でのジョブシャドウイング

- ・実施日 11月28日（水）～11月30日（金） 4回生77名
- ・企 業 野村総合研究所，札幌地方検察庁，JICA北海道など
- ・内 容 外国人への接客や外国企業との連携，海外事業に取り組む企業での研修や体験活動

■本校及び他校ALTによるディスカッション・プレゼンテーションに係る指導

- ・期 間 11月～12月 5回生対象 海外研修の事前学習として総合的な学習の時間で実施

■先進校等への視察・発表報告等

日時	項目	参加者	内容
10月27日(土)	北海道大学新渡戸カレッジ	生徒1	北海道大学のゼミ生とともに，ニセコの外国人居住者の急増地域を視察
11月30日(金)	市立札幌開成中等教育学校訪問	教員5，生徒77	SGH課題研究の相互発表，SGHに係る意見交流
12月15日(土)	2018年度SGH全国高校生フォーラム	教員1，生徒2	全国のSGH指定校等の代表生徒による英語でのポスターセッションやディスカッション及び交流
2月1日(金)	平成30年度北海道SGH高校生ミーティング	教員2，生徒6	北海道内SGH指定校等（7校）による取組のプレゼンテーション及び交流
3月8日(金)	北海道科学英語発表・交流会	教員1，生徒3	高校生によるポスターセッション，研究者・留学生による質疑
3月13日(水)	北海道農政部における成果発表（5回生）	教員1，生徒4	SGH課題研究成果を関係機関で発表
3月18日(月)	胆振振興局における成果発表（4回生）	教員1，生徒4	SGH課題研究成果を関係機関で発表

7 目標の進捗状況，成果，評価

(1) 「課題解決力」の育成

- 「課題研究に関する国内の研修参加者数」，「グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数」，「課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数」など，過去4年間における課題研究に関する活動指標（アウトプット）を超える数値を達成することができた。「課題研究に関する海外大学・高校等の数」や「課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数」，「課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数」

などは、年度によって若干の差はあるが、着実にネットワークを広げており、課題研究の充実につながっている。

また、次の生徒の感想やアンケート結果にあるように、食料問題に関する講演やワークショップ、探究型学習や大学訪問等を通して、情報収集力や整理・分析力とともに、考察・思考力など課題を解決する力を向上させることができたと考えている。

◆グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット、抜粋）

項目	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
課題研究に関する国外の研修参加者数	72	80	80	82	84
課題研究に関する国内の研修参加者数	222	220	223	222	226
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	4	11	7	8	11
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数	13	27	21	22	30
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数	8	8	14	10	11
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	2	6	14	19	30

【食料問題に関する講演等における生徒の意見・感想（抜粋）】

- ・「グローバルな人材というのは、特殊な限られた人にしかなれないと思っていたが、身近な職業にも海外との関わりがあり、身近な場所でも世界の人の役に立てるということが分かった。」
- ・「現在、海外でホタテの需要が高まっていることを聞いたので、私たちの研究が上手くいけば、養殖で北海道の水産物の売り上げを上げることができる。研究の最終的なゴールが見えてきたような気がした。」
- ・「農業は奥が深い。災害時にどのような対応を取ってしのぐかが気になった。輸出と消費のバランスを考えて食品ロスを減少できることができればいいと思った。」
- ・「ビジネスにおいて何に注目すべきか、今までざっくりとしか考えてこなかったが、誰を相手にするのか、ビジネスを行う価値、客対応の方針、窓口、活動内容、リソース、キーパートナー、収入の流れ、費用、これらをすべて考える。ビジネスのことでこれから研究を進めていくためにも、今回の講演はとても有意義でした。」
- ・「今の日本にはあまり食品ロスの取組がないと思っていたが、思っていたよりもたくさん取組があっって驚いた。もし、食品ロスをビジネスにするのなら内容や利便性を考えるとともに、多くの人に知ってもらい利用してもらわないと、内容が良くても意味がないのであらゆる方法を考えていきたいと思った。」

◆アンケート結果の比較①（4回生、課題研究開始期の平成30年9月と半年後の平成31年2月）

数値はいずれも各質問項目に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の回答を合算したもの。

質問項目	30年6月	31年2月	増減
物事を考えるときに、必要なデータや情報を探すことができる。	73.7%	76.4%	+2.7
集めたデータや情報を整理・分類することができる。	68.4%	75.0%	+6.6
読み手が理解できるよう表現を工夫しながら文章を書くことができる。	48.7%	62.5%	+13.8
他人の意見に耳を傾け、理解しようとしている。	81.6%	93.1%	+11.5
聞き手が理解できるよう表現を工夫しながら説明や意見を述べるができる。	59.2%	48.6%	-10.6

○ 4回生は、校外研修として、酪農学園大学を訪問して教授ら7名により指導を受け、課題研究を進める際の留意事項やデータの扱い方など多くを学んだ。この研修を経て、課題研究への具体的な取組が本格化し、研究に対する意欲が高まるとともに、情報活用力や表現力が着実に身に付いた。このことは、課題研究取組の初期の昨年9月と半年後の今年2月の生徒アンケート結果からもうかがえる。

○ 1月に実施した課題研究最終報告会では、全18グループがポスターセッション形式で研究成果を発表したが、農村の過疎対策、コンビニエンスストアの食品表示、環境に配慮した農業など、食と農業に関連して設定されたテーマに沿って、豊富なデータや斬新なアイデアを元に多様な発表を行った。なお、この発表

会での優秀グループは、3月18日（月）、北海道胆振総合振興局産業振興部において農務課職員や農業改良普及員、北海道教育庁胆振教育局職員等に対して研究成果を発表する。

- 上記アンケートにおいて、「聞き手が理解できるよう表現を工夫しながら説明や意見を述べるができる。」の項目が大きくポイントを下げているが、これは、昨年11月、初の試みとして4・5回生合同の中間報告会を実施した際、5回生の表現力豊かで堂々とした発表を受け、自分たちの未熟さを感じるとともに研究手法やスキルアップの必要性を痛感させられたことによるとと思われる。

◆アンケート結果の比較②（5回生経年比較）

（5回生、課題研究開始期の「平成29年9月」、半年後「平成30年2月」、現在「平成31年2月」の比較）  
 数値はいずれも各質問項目に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の回答を合算したものの。

質問項目	29年9月	30年2月	31年2月	H29-H31
物事をいろいろな角度（視点）から考えることができる	76.9%	73.8%	82.1%	+ 5.2
集めたデータや情報を整理・分類することができる。	80.0%	78.7%	86.6%	+ 6.6
聞き手が理解できるよう表現を工夫しながら説明や意見を述べるができる。	69.2%	73.8%	83.6%	+14.4
読み手が理解できるよう表現を工夫しながら文章を書くことができる。	56.9%	77.0%	83.6%	+26.7

- 従来、情報収集がインターネットに頼りがちという傾向が見られたが、取材、アンケート、実験を取り入れるなど、必要なデータを能動的に集める態度が身に付いてきている。また、今年度、研究の途中で経過を発表するミニ発表会や4・5回生合同の中間報告会を複数回実施した。この過程で、生徒相互の質問力が向上し、質疑応答の質が高まる中で、多角的に考える態度やスキルが徐々に身に付いてきているものと考えている。
- 1月24日（木）に開催した第2回運営指導委員会では、5回生の「課題研究最終発表会」を参観していただいたが、委員から「発表後の質疑応答でのこちらの指摘に対して、生徒から『指摘されたその方法なら起業もできますね』と返答があった。このように、一般の高校生があまり持たない発想を持つことができる点が良い。2年前と比べ明らかに進歩している。海外研修ではかなり鋭い指摘を受けたと聞いているが、その経験が生きていると感じた。」という意見や「必要なデータの収集に対する評価の低さは、生徒の到達目標が上昇していることの表れではないかと思う。論文作成については、今日の発表を見る限り、面白い論文ができそうだと期待している。」など多数の肯定的評価をいただいた。上記の生徒アンケート結果からも、4・5回生の2年間で、課題研究の在り方や身に付けさせたい資質・能力が着実に定着しているといえる。

(2)「国際的な対話力」の育成

- 積極的にコミュニケーションを図る態度と対話できる表現力については、英語の授業、海外研修（ワシントン大学でのディスカッション等）や海外フィールドワーク、イングリッシュキャンプ、テレビ会議を活用した意見交換などの取組を通し、さらに向上させることができたものと考えている。

【海外研修等における生徒の意見・感想（抜粋）】

- ・「タンザニアの人の温かさと、支援などで奮闘する日本人の方々の情熱に感動しました。たくさんの刺激と感動で視野が大きく広がったと感じました。また、自分の足で行って、実際に見て、触れて、感じて考えることの大切さを学ぶことができました。」（海外フィールドワーク）
- ・「研修をとおり、オーストラリアの人々の食への関心の高さを実感したが、現地では、日本こそ食に対する意識が高いという声も聞いた。現地の人々と話をして、日本が海外からどう思われているかを知り、自分達が感じていることとはギャップがあるとわかった。」（海外フィールドワーク）
- ・「国際協力の活動においても、まず自国について理解を深める重要性を強く感じた。自国について十分に理解した上で国外での活動を行うことにより、自国との関わりや、文化の違いを考慮した、一方的なものではない、その国に寄り添った国際協力ができると思う。」（世界の架け橋プロジェクト）

◆アンケート結果の比較①（4回生年度内比較；平成30年9月と平成31年2月）

質問項目	30年9月	31年2月	増減
日本や世界にある様々な問題について学び、知識や理解を深めたい。	68.4%	81.9%	+13.5
将来、海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい。	36.8%	59.7%	+22.9
将来、グローバル社会に通用する力を身に付けたい。	71.1%	80.6%	+9.5
世界の人々とコミュニケーションをするため、英語の高度な資格取得に挑戦したい。	56.6%	66.7%	+10.1
自分のふるさとや北海道について、日本語や英語で世界の人に紹介できる。	34.2%	45.8%	+11.6
日本の伝統文化を日本語や英語で世界の人に紹介できる。	30.3%	34.7%	+4.4

◆アンケート結果の比較②（5回生経年比較）

（5回生、課題研究開始期の「平成29年9月」、半年後「平成30年2月」、現在「平成31年2月」の比較）  
数値はいずれも各質問項目に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の回答を合算したもの。

質問項目	29年9月	30年2月	31年2月	H29-H31
趣味や特技、興味・関心を持って調べていることなど、外国の人に伝えることができる得意分野を持っている。	49.2%	49.2%	62.7%	+13.5
英語を使って積極的にコミュニケーションをとることができる。	47.7%	29.5%	49.3%	+1.6
日本の伝統文化を日本語や英語で世界の人に紹介できる。	35.9%	45.0%	62.7%	+26.8
自分のふるさとや北海道について、日本語や英語で世界の人に紹介できる。	40.0%	59.0%	64.2%	+24.2

- 生徒アンケートの結果を比較すると、4回生、5回生ともに「自分のふるさとや北海道について、日本語や英語で世界の人に紹介できる。」「日本の伝統文化を日本語や英語で世界の人に紹介できる。」の項目でポイントが大きく上がっている。3回生までは身の回りのことを表現するだけにとどまっていたが、4回生以降のSGHの取組の中で、海外フィールドワークや国際交流、海外研修等実際のコミュニケーションの場を経験したことにより、次第に英語をツールとして活用する姿勢が強まったと考えられる。また、5回生については、海外研修での3日間のホームステイやワシントン大学での大学生とのディスカッションなどの実体験を通して自信や意欲が高まったため、「英語を使って積極的にコミュニケーションをとることができる。」が1年間で29.5%から49.3%へと飛躍的に上昇したと考えられる。

- 英語に関する資格取得については、実用英語技能検定2級以上の取得者総数が、1月時点で56名となっ

		30年度	29年度	28年度	27年度	26年度	25年度
4回生	準2級	42	44	42	39	25	22
	2級	8	8	18	7	5	10
	準1級	0	1	0	0	0	0
5回生	準2級	42	30	33	37	31	33
	2級	13	24	20	13	18	23
	準1級	2	2	4	1	0	0
6回生	準2級	26	23	40	27	31	31
	2級	31	23	13	22	27	16
	準1級	2	7	3	1	0	1
合計	準2級	110	97	115	103	87	86
	2級	52	55	51	42	50	49
	準1級	4	10	7	2	0	1

（参考）実用英語技能検定資格の取得状況（平成31年1月15日現在）

ている。この後、第3回目の検定に約90名が受検することから、今年度はこの数が過去最高となることが予想されている。より高度な資格取得に挑戦しようとする意欲の高まりや英語力向上の背景には、本校のSGHプログラムが目指す国際的な対話力の必要性を生徒が感じてくれたものと考えられる。

- 「GTEC（英語）」のトータルスコア

	平成30年1月	平成30年6月	上昇した点数
今年度4回生	438.1点	446.6点	8.5ポイント
今年度5回生	466.2点	487.9点	21.7ポイント

※高1生全国平均 414.0点

※高2生全国平均 446.0点



GTECは、全国の1100校を超える高校で採用され、約73万人が受検する「聞く」、「読む」、「書く」の3技能を測るスコア型英語テストである。筑波大、大阪大、千葉大、横浜市立大、都留文科大、中央大、立教大、関西学院大など、約270校の大学・短大の一般・推薦・AO入試でスコアが活用されている。全国平均と比較すると、本校は4回生で全国平均より約30点、5回生で約40点高い数値となっている。

### (3)「情報発信力」の育成

- 課題研究の発表、海外フィールドワーク報告、海外研修における姉妹校でのプレゼンテーション、ワシントン大学でのディスカッション、海外フィールドワークにおける現地学生との意見交換、留学生等とのイングリッシュキャンプでのディスカッション、テレビ会議などの取組を通して、自分の意見や考えなどを伝えようとする意欲と表現力を向上させることができたものと考えている。

#### ◆グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット、抜粋）

項目	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
先進校としての研究発表回数	3回	4回	10回	10回	12回

#### 【SGH全国フォーラムや北海道SGH高校生ミーティングにおける生徒の意見・感想（抜粋）】

- ・「分科会で積極的に話し始めたり、以前より発表のスキルが向上したりと、自分の成果を感じた。しかし、ここをゴールにするのではなく、英語や発表のレベルなど、今よりも更に向上させたいと思った。」
- ・「他の学校の生徒は、コミュニケーション力だけでなく、英語力や膨大な知識量があるということを感じることができた。自分ももっと世界や日本、北海道について知るべきだと思った。」
- ・「スタートセッションでは緊張もしたが、自信や達成感を得ることができた。また、他校の発表を聞いて、英語力や大勢の前で堂々と発表する力をさらに高めたいと思った。」

#### ◆アンケート結果の比較①（4回生年度内比較；平成30年9月と平成31年2月）

質問項目	30年9月	31年2月	増減
自分の気持ちや考えを小グループで発表できる。	76.3%	91.7%	+15.4
自分の考えを不特定多数の前で発表できる。	51.3%	63.9%	+12.6
自分のふるさとや北海道について、日本語や英語で世界の人に紹介できる	34.2%	45.8%	+11.6
日本の伝統文化を日本語や英語で世界の人に紹介できる	30.3%	34.7%	+4.4

#### ◆アンケート結果の比較②（5回生経年比較）

（5回生、課題研究開始期の「平成29年9月」、半年後「平成30年2月」、現在「平成31年2月」の比較）  
数値はいずれも各質問項目に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の回答を合算したもの。

質問項目	29年9月	30年2月	31年2月	H29-H31
聞き手が理解できるよう表現を工夫しながら説明や意見を述べるができる。	69.2%	73.8%	83.6%	+14.4
読み手が理解できるよう表現を工夫しながら文章を書くことができる。	56.9%	77.0%	83.6%	+26.7
自分の気持ちや考えを小グループで発表できる。	89.2%	91.8%	94.0%	+4.8
自分の考えを不特定多数の前で発表できる。	60.0%	62.3%	68.7%	+8.7
日本の伝統文化を日本語や英語で世界の人に紹介できる。	35.9%	45.0%	62.7%	+26.8
自分のふるさとや北海道について、日本語や英語で世界の人に紹介できる。	40.0%	59.0%	64.2%	+24.2

- 生徒のアンケート結果を比較すると、発表や紹介など自分の気持ちや考えを発信することに関して、押し並べてポイントが上昇している。これは、各種講演会終了後も必ず振り返りのディスカッションや発表を行う等の取組に加え、日常の授業においても、生徒の学力向上と「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を目指し、グループワークや意見発表の場を多く設定している成果の表れであると考えられる。



- 1月24日(木)に開催した第2回運営指導委員会では、5回生の「課題研究最終発表会」を参観していただいたが、委員からは「気概をもって取り組んでいるということが感じられた。話し方に力強さ、学びに向かう力を感じた。」、「プレゼンテーションをした生徒に対して、見学した生徒が質問をするのが非常によかった。質問をすることは、自分の問題として受け止めているということである。また、プレゼンテーションの技術や発表する態度は、高校での指導の成果であるため、そのような生徒が大学に入っていくのはとても楽しみである。」など多数の肯定的評価をいただいた。

## ■成果、評価

- 前述のとおり、研究開発5年次の取組をとおして、課題研究を軸とした取組の統合を図ることにより、グローバル・リーダーとして求められる資質である「国際的な対話力」、「課題解決力」、「情報発信力」の育成を目指す提案型探究学習の基盤を強化し、研究開発の柱である3つの力を育成する体系を整えることができた。
- 「課題解決力」について、今後は、課題研究を通じて培った「情報収集・活用力」、「論理的思考力」、「問題発見力」、「意見交換・調整力」、「批判的思考力」等を各教科の授業で活用し、生徒の学力向上と「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる研究を継続したい。また、大学との連携を継続し、リサーチスキル、テーマ設定力、多角的・論理的な思考力の向上等、情報リテラシーを育成するための系統的・有機的な教育計画を立て、引き続き課題研究の指導に当たりたい。
- 「国際的な対話力」について、英語力向上への意欲の向上とともに、実際のコミュニケーションの場を経て年々自信を深め、ふるさとや日本について世界の人々に紹介することへの関心の高まりも見られた。今後は英語に関する教科科目の授業を軸にしながらかも、SGHで培ったTV会議システムのノウハウなど実際にコミュニケーションできる機会の一層の拡充や、海外研修、イングリッシュキャンプや異文化理解セミナーなどを統合し、生徒の対話力の一層の向上に努めたい。
- 「情報発信力」について、各教科・科目で横断的にプレゼンテーションやディスカッションなどの言語活動に取り組み、その指導内容を体系化するとともに、英語科と連携し、議論やプレゼンテーションに堪える英語力と質問力・表現力を育成し、生徒の情報発信力のなお一層の向上に努めていきたい。

## 8 5年間の研究開発を終えて

### (1) 教育課程の研究開発の状況について

#### I 学校設定科目の設置(4回生「SG社会と情報」、5回生「SG家庭基礎」)

4回生と5回生において、課題研究を進める上で、平成27年度より学校設定科目として新たに「SG社会と情報」、「SG家庭基礎」という2科目を設置した。すでに多くの実施内容が含まれていた「総合的な学習の時間」だけを使って課題研究を進めることが困難な状況のもと、中等教育学校の特例を活用し、前期課程で履修する「技術家庭」において、本来高等学校で学ぶ「社会と情報」並びに「家庭基礎」の内容の一部を先取りして学習することにより、この2つの学校設定科目の中で、課題研究に必要な課題設定や調査・研究、及び発表資料作成などの時間を確保することができた。

「SG社会と情報」においては、単元名「情報の活用と表現」の中で、2単位70時間のうち35時間を配当し課題研究にあてた。また、「SG家庭基礎」においては、本校の課題研究の共通テーマが「食と農業」であったことから、単元名「食生活をつくる」の中で、同様に2単位70時間のうち35時間を配当し課題研究にあてた。

#### II 授業内でのテレビ会議の活用

専用のインターネット回線を使い、オーストラリアの高校とのテレビ会議を実施してきた。研究指定当初は、提携先との連携や回線の不具合等で思うように実施ができず、3年目に当たる平成28年度から4回生の「コミュニケーション英語Ⅰ」において、オーストラリアのアーミデール高校日本語クラスと本格的なテ

レベ会議を行うことができるようになった。平成28年度には6回、平成29年度には16回、平成30年度には18回のテレビ会議が行われた。平成30年度の実施内容は以下のとおりとなっており、英語科のカリキュラムに着実に位置付けられた。生徒は、「自分たちのスクールライフ」や「日本の文化」、さらには「日本の観光地」や「日本の食文化」など、さまざまなテーマについて英語でプレゼンテーションをし、さらにオーストラリアの高校生からのプレゼンテーションに対して英語で質問するなど、TV会議を通じて、情報を発信する力や質問力など、多くの身に付けるべき力を養った。

(以下、生徒の感想から抜粋)

- ・「相手に伝わるような努力が少し足りなかったと思う。ジェスチャーを使ったり、話し方に強弱をつけたりするべきだった。また、もっと積極的に質問すべきだと思った。オーストラリアの人たちは明らかに準備していない感じがあって、この大らかさが海外らしく感じ、やはり海外ってこういうものかと思った。」
- ・「思ったよりオーストラリア人がシャイで日本人と変わらないことに驚いた。アミリア(留学中のカナダ人高校生)と話した時もそうだったが、外国人が皆積極的というわけではないようだ。英語を聞き取ることが思ったよりも出来なかった。テストのリスニング教材とは別物だなと思った。」

	Date	Time	period	Year (JP)	Year (AUS)	Topics	Deadline Slides, Questions
1	5月8日(火)	11:00-11:40am	3	6EC	Year 11-1	TOPIC JAPAN - Japanese school life and Spring in Japan	5月7日
2	5月11日(金)	11:00-11:40am	3	5EngAdv	Year 10-1	TOPIC JAPAN - Japanese school life and Spring in Japan	5月7日
3	5月15日(火)	13:45-14:20pm	5	5	Year 7(2)	TOPIC AUSTRALIA - family, daily life and interests TOPIC JAPAN - how to use chopsticks, Japanese house (taking shoes off, futon, shoji, ofuro etc)	5月11日
4	5月17日(木)	13:45-14:20pm	5	5	Year 9-1	TOPIC JAPAN - Japanese school life	5月11日
5	6月1日(金)	13:45-14:20pm	5	5	Year 10-2	TOPIC JAPAN - Popular culture (music, fashion, Anime, Manga, etc.)	5月25日
6	6月14日(木)	13:45-14:20pm	5	4	Year 9-2	TOPIC JAPAN - Popular culture (music, fashion, Anime, Manga, etc.)	5月31日
7	6月19日(火)	11:00-11:40am	3	4	Year 11-2	TOPIC JAPAN - Popular culture (music, fashion, Anime, Manga, etc.)	6月12日
8	6月22日(金)	11:00-11:40am	3	3	Year 10-3	TOPIC JAPAN-National and local information (sightseeing spots, industry, famous food, etc.)	6月15日
9	8月23日(木)	13:45-14:20pm	5	4	Year 9-3	TOPIC JAPAN-National and local information (sightseeing spots, industry, famous food, etc.)	8月20日
10	8月24日(金)	13:45-14:20pm	5	3	Year 10-4	TOPIC JAPAN-Food customs (daily meals, special meals), tradition, manners, holidays and festivals	8月20日
11	9月14日(金)	11:00-11:40am	3	4	Year 10-5	TOPICS JAPAN-Family life (time for family), housing	8月31日
12	9月18日(火)	13:45-14:20pm	5	4	Year 7(3)	TOPIC AUSTRALIA - family, daily life and interests TOPIC JAPAN - how to use chopsticks, Japanese house (taking shoes off, futon, shoji, ofuro etc) ?? anything you like to present to us :)	9月11日
13	9月20日(木)	13:45-14:20pm	5	3	Year 9-4	TOPIC JAPAN-Food customs (daily meals, special meals), tradition, manners, holidays and festivals	9月13日
14	10月23日(火)	10:00-10:40am	2	4	Year 11-4	TOPIC JAPAN-Food customs (daily meals, special meals), tradition, manners, holidays and festivals	10月16日
15	10月26日(金)	10:00-10:40am	2	4	Year 10-6	TOPIC JAPAN- Common global issues and solutions	10月19日
16	11月2日(金)	12:00-12:40am	4	4	Year 9-5	TOPICS JAPAN-Family life (time for family), housing	10月26日
17	11月9日(金)	12:00-12:40pm	4	4	Year 8	TOPIC JAPAN - Japanese school life	11月2日
18	11月30日(金)	12:00-12:40pm	4	3	Year 9-6	TOPIC JAPAN- Common global issues and solutions	11月16日

### III 海外研修におけるプレゼンテーション

本校は開校当初から5回生で海外研修を行っている。姉妹校提携を結んでいるシアトルのボッセル高校とは当初から変わらぬ交流を続けているが、SGHの研究指定を受けてからは、自分たちの課題研究の成果をワシントン大学やブリティッシュ・コロンビア大学で発表するようになった。生徒は自らの研究を英訳し、現地の大学生にプレゼンテーションをした上で、意見交流を行う。それまでであったカリキュラムが、SGH事業によって深化・発展した好例の一つである。

(以下、生徒の感想から抜粋)

- ・「失敗を恐れなくて積極的にコミュニケーションを図ることの大切さを痛感した。積極的に話して、通じたら自信にすれば良いし、通じなかったり、分からなかったりすること自体がこれからの成長の活力になると強く感じた。」(海外研修プレゼンテーション)
- ・「大学生はやはり自分の意見をしっかり持っていると感じた。高校生だけではなかなか出ないような考

えや視点でアドバイスをくれ、物事を考えるヒントになった。」（海外研修ディスカッション）

(2) 高大接続の状況について

◆大学進学率の推移

項目	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	平均
4年生大学への進学率	61.0%	52.6%	69.4%	72.0%	63.8%	未確定	63.8%

◆SGH目標設定シート（指定4年目以降に検証する成果目標より、抜粋）

項目	27年度	28年度	29年度	30年度
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合	25%	30%	31.9%	41.3% (出願者)
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の割合	—	—	57.1%	72.5%

- ほぼ6～7割の生徒が4年生大学に進学する本校であるが、卒業後の大学進学先について、上の指標にも見られるとおり、「国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合」が年々高まっている。また、「大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の割合」（行こうと考えている割合）も年を追って高まっている。本校は、従来より国際理解教育に重点をおいたカリキュラムを組んでいるが、SGH事業の各種プログラムの影響や海外研修や海外フィールドワークの後に行う全校集会での報告などの工夫により、海外に目を向ける生徒が5年間で明らかに増えている。
- 学部についても、例えば、従来の「経済学部」から「国際経済学部」へ、「経営学部」から「国際経営学部」へ、さらには、ここ数年で「グローバルコミュニケーション学部」などへの進学希望が増えているのが特徴である。
- さらに、本校の課題研究のテーマが『食と農業』であることから、農業関係の学部へ進学する生徒も増えている。平成28年度の東京農業大学、平成29年度の鹿児島大学獣医学部、九州大学農学部、弘前大学農学生命科学部、本年度では明治大学農学部、宇都宮大学農学部、酪農学園大学獣医学部、酪農学園大学環境共生学類、東京農業大学など、農学系の進学希望者が年々増えている。
- これらは、SGH課題研究での学びが生徒のキャリア形成に影響を与えたと考えられる。

◆SGHに関する教職員アンケート（平成31年2月6日、全教職員37名回答）

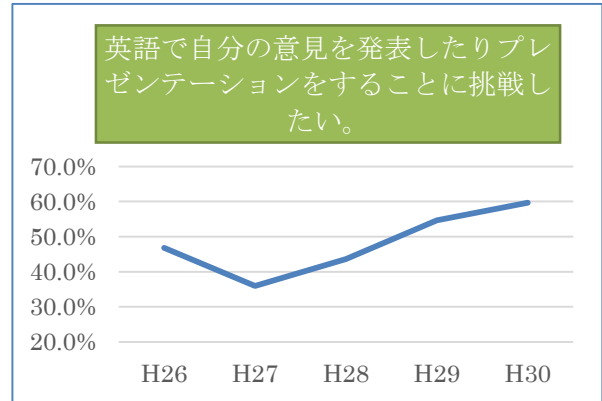
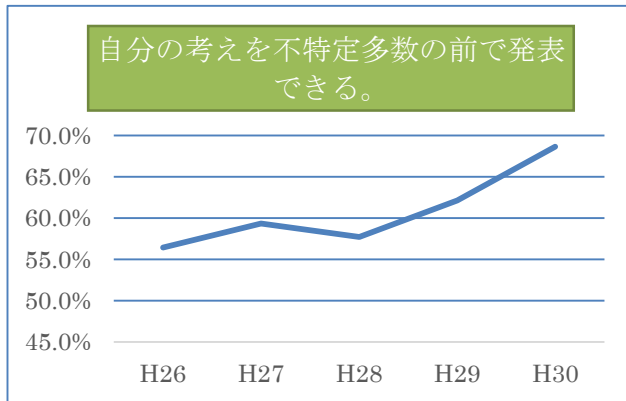
質問事項	大いに	ある程度	それほど	全く	肯定的	否定的
SGHの様々な取組は、生徒のキャリア形成に影響を与えたと思いますか。	7名	27名	3名	0名	92%	8%

- SGHの様々な取組が生徒のキャリア形成に多少なりとも影響を与えたと考える教職員が9割を超えている。生徒と接している教員たちも、生徒のキャリア意識の変容を感じていることが見て取れる。また、SGHでの探究活動が発端となって、大学に入ってから研究につながっているケースも多い。
- なお、本校では大学の単位履修制度については設置していない。

(3) 生徒の変化について

I プレゼンテーションに対する意識の変化

◆生徒アンケート結果の推移（5回生；平成26年度～平成30年度）



- 5回生の定点比較により、5年間の推移を見ると、不特定多数の前で発表することに対して、年々抵抗感が薄れていることが読み取れる。これは、課題研究に取り組むにあたり、中間発表会や異年次の合同発表会、さらには最終発表会や成果報告会など、数多くの発表の場を設定していることが背景としてあげられる。
- それに加え、特に3年目以降、教科のSGH化をスローガンに、「主体的・対話的で深い学び」を目指して授業改善を進める中、授業において対話的に学び合う場面が増えていることも影響していると考えられる。このことは、前述した英語力の向上と相まって、「英語で自分の意見を発表したり、プレゼンテーションをすることに挑戦したい。」という生徒の意欲につながっていると考えられ、上のグラフからも、そのことが読み取れる。

◆アンケート結果の比較（各年度の5回生の比較；平成27年度～平成30年度）

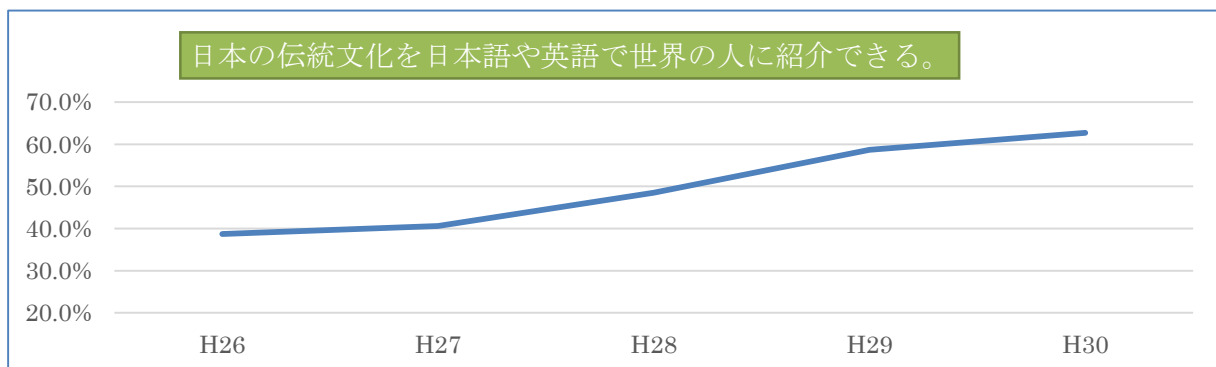
数値はいずれも各質問項目に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の回答を合算したもの。

質問項目	平成26年度4回生	平成27年度4回生	平成28年度4回生	平成29年度4回生
	→平成27年度5回生	→平成28年度5回生	→平成29年度5回生	→平成30年度5回生
自分のふるさとや北海道について、日本語や英語で世界の人に紹介できる。	43.1%→54.7% (+11.6)	50.7%→50.7% (+0)	55.4%→70.7% (+15.3)	39.1%→64.2% (+25.1)

- 生徒アンケートを見ると、「自分のふるさとや北海道について、日本語や英語で世界の人に紹介できる。」という項目に関して、4回生から5回生への変容が読み取り可能な4つの年度のうち、平成28年度の5回生を除いて、他のすべての年度の5回生で大きくポイントが増えている。

5回生が12月に実施する海外研修では、現地の高校生や大学生へのプレゼンテーション、さらにはホストファミリーなどとの交流を通じて、自分のふるさとや自国の文化を外国の人に伝えることが必要となってくる。この経験が生徒たちに自信をもたらす、海外の人との垣根が次第に低くなっていくことが予想される。結果として、次のグラフに見られるとおり、「日本の伝統文化を日本語や英語で世界の人に紹介できる」という回答が年々増えている。

◆生徒アンケート結果の推移（5回生；平成26年度～平成30年度）



## II 国際交流・異文化理解に対する意識の変化

### ◆SGH目標設定シート；本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム、抜粋）

項目	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合	35.0%	37.2%	41.4%	28.3%	51.0%	56.3%
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合	45.0%	20.0%	31.9%	24.3%	41.7%	44.0%
大学主催によるコンクール等への英語論文の投稿	0人	0人	71人	73人	76人	77人
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数	4人	3人	11人	38人	36人	27人

○ SGH事業の伸展に伴う国際交流や異文化理解への高まりは、海外留学や海外での活躍を目指す意識となって表れている。生徒アンケートからは、「将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合」が、SGH事業開始前と比較して、約1.6倍に増えている（35.0%→56.3%）ことが分かる。

また、「自主的に留学又は海外研修に行く生徒数」も事業開始前と比較すると、ここ3年ほどで約10倍に増えている。留学体験を全校集会で発表したり、クラスの中で話題にしたりする中、生徒たちにとっては、海外との距離がどんどん近いものになっていることを感じる。

### ◆「北海道学力向上実践事業」学習状況調査における項目

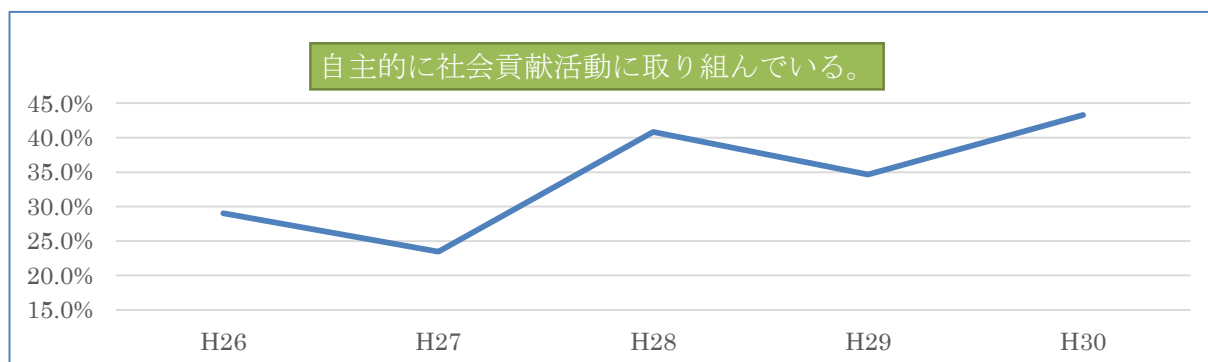
【高校入学前に比べ諸外国の人々との交流、異文化や生活習慣を知ろうとする意欲が高まった。】

	そう思う		どちらかといえば そう思う		肯定的意見		どちらかといえば そう思わない		そう思わない		否定的意見	
	本校	全道平均	本校	全道平均	本校	全道平均	本校	全道平均	本校	全道平均	本校	全道平均
H26	27.4%	13.9%	42.4%	28.1%	69.8%	42.0%	20.5%	31.7%	11.0%	23.0%	31.5%	56.7%
H27	37.8%	15.3%	39.2%	28.0%	77.0%	43.3%	14.9%	32.7%	8.1%	25.3%	23.0%	58.0%
H28	31.9%	15.5%	44.9%	28.9%	76.8%	44.4%	14.5%	31.6%	8.7%	24.0%	23.2%	55.6%
H29	50.0%	16.0%	36.5%	28.7%	86.5%	44.7%	13.5%	31.2%	0.0%	24.1%	13.5%	55.3%
H30	46.5%	16.7%	45.1%	30.3%	91.6%	47.0%	4.2%	29.9%	4.2%	23.0%	8.4%	52.9%

○ 上の表は、北海道教育委員会が継続的に実施している「北海道学力向上実践事業」学習状況調査の中の一項目である「高校入学前に比べ諸外国の人々との交流、異文化や生活習慣を知ろうとする意欲が高まった。」という質問に対する回答の推移である。この調査は高校1年生（本校では4回生）の2～3月に実施されるもので、高校生活の1年目を振り返る内容となっている。この質問に対して、肯定的な回答をした本校の4回生は、平成26年2月実施分から順に69.8%→77.0%→76.8%→86.5%→91.6%と毎年のように上昇している。従来から本校の生徒は、北海道内の他校平均よりかなり高い数値を示していたのであるが、この高まりは、SGH事業の進展と軌道を一つにする結果となっており、外国人との交流や異文化理解への意欲の高まりにSGH事業が大きな影響を与えていることを端的に表す結果となっている。

## III 社会への働きかけ

### ◆生徒アンケート結果の推移（5回生；平成26年度～平成30年度）



◆SGH目標設定シート；グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット，抜粋）

項目	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	5人	2人	6人	14人	19人	30人

○ 社会への働きかけについては、本校が平成21年度に、北海道初のユネスコスクールに認定されたことと関わりがある。本校の国際理解教育は、開校当初より、コミュニケーションツールとしての外国語教育を重視しながら、異文化理解に関わる体験学習を6年間の教科学習、総合的な学習の時間、特別活動を通じて段階的・系統的に展開しており、これにより、異文化や自国文化の理解、国際社会の現状や課題への理解を深めてきた。ユネスコスクールとしての活動が始まると、従来のカリキュラムに加え、学校の外へと働きかける活動が充実し、地域のユネスコ協会などと連携しながら、文化祭などでは、生徒会を中心とした「ユネスコ展示」の場をつくり、ESDやSDGsについて生徒たちが情報を発信したり、各種支援活動などを行ったりしてきた。

SGH事業の定着とともに、生徒たちに国際交流・異文化理解の意識が一層高まる中、ユネスコスクールとしての活動が加速し、平成28年度には「ユネスコ有志実行委員会」が有志生徒によって組織された。現在では、ボランティア活動やユネスコの各種大会などへの参加はもちろん、さらに多くの生徒がユネスコ活動に携わりながら現在に至っている。上のデータは、こういった経過が反映したものである。

#### IV 教員から見た生徒の変容

◆SGHに関する教職員アンケート（平成31年2月6日，全教職員37名回答）

質問事項	大いに	ある程度	それほど	全く	肯定的	否定的
SGHの様々な取組は、生徒の「国際的な対話力」向上に寄与したと思いますか。	19名	17名	1名	0名	97.3%	2.7%
SGHの様々な取組は、生徒の「課題解決力」向上に寄与したと思いますか。	11名	23名	3名	0名	91.9%	8.1%
SGHの様々な取組は、生徒の「情報発信力」向上に寄与したと思いますか。	17名	19名	1名	0名	97.3%	2.7%
SGHの様々な取組は、生徒の異文化に対する興味関心の高まりに寄与したと思いますか。	21名	13名	3名	0名	91.9%	8.1%
SGHの様々な取組は、学習意欲の向上に寄与したと思いますか。	5名	24名	8名	0名	78.4%	21.6%

○ 平成31年2月に実施した教職員アンケート（全員が回答）では、本校がSGH事業を通じて生徒に身に付けさせたい3つの力である「国際的な対話力」，「課題解決力」，「情報発信力」の3項目に関して、いずれの項目についても、ほとんどの教員が、SGH事業がそれぞれの力の向上に寄与していると考えていることが分かる。

○ 「SGHの様々な取組は、生徒の異文化に対する興味関心の高まりに寄与したと思うか。」という問いに対して、先に示した生徒への問いとほぼ同じような数字が教員からも寄せられている（生徒91.6%，教員91.9%）。生徒の実感と教員の実感の間に乖離がないことを確認することができた。

○ 学習意欲の向上への寄与については、否定的な見解を持つ教員が2割程度おり、SGH事業での学びが教科の学びや学びに向かう意欲につながる工夫がさらに求められるところである。

（以下，自由記述欄から抜粋）

- ・「年次が上がるにつれて生徒自身が成長していく姿がよく分かった。農業や食料問題といったテーマ設定の枠組みがあるため、探究課題や手法のかぶりが多く見られた。どこかで個人による自由テーマで研究させて



もよいのではないか。」

- ・「外部講師を招いての講義や講演は大変有意義だったと思います。外部機関との関わりが継続的でより深いものになれば、さらに深い研究ができるのではないかと思います。」
- ・「生徒の発信力はとても向上したと思います。多くの生徒の刺激になっているのは事実ですが、「研究」の本当の形にはまだ道は続いていると思います。高校の時点での研究としては十分なものと言っていいと思います。」
- ・「論理的に物事を考え、それを伝えるように工夫して発表するという経験は生徒たちにとって、とても良い成長につながると思いました。能力の低い子たちもグループのメンバーに引っ張られながら、学べていたのでよかったです。」
- ・「研究を進めるうちに、課題が山積していることに気づいた生徒が、「有効な解決が見つかりませんでした」と報告をまとめた時、「解決を示さない報告はダメだ」という評価を受けた。無理に解決を急がせることによって、改善できないと研究の意味がないという誤った感覚を生徒に与えてしまうのではないか。」
- ・「学校の魅力を高めてくれる素晴らしい事業でした。また、他では経験し得ないような取組を生徒が経験でき、さらに直接参加しなかった生徒も、友人たちの経験から、今後の人生のあり方に大きく関わるような影響を受けていました。一握りのエリート生徒だけでなく、現在の学力による輪切り的高校入試ではSGHの高校には入学できないであろう学力層の生徒も、本校ではこういった活動に参加できたことが尚更素晴らしいと思います。」

#### (4) 教師の変化について

◆SGHに関する教職員アンケート（平成31年2月6日、全教職員37名回答）

質 問 事 項	大いに	ある程度	それほど	全く	肯定的	否定的
SGHの様々な取組は、本校の教育活動に役立っていると思いますか。	21名	16名	0名	0名	100%	0%
SGHの様々な取組に関わることは、自身の授業改善につながっていますか。	14名	15名	8名	0名	78.4%	21.6%
SGHの様々な取組に関わることは、教員としてのモチベーションの高まりにつながっていますか。	11名	16名	8名	2名	73.0%	27.0%
質 問 事 項	肯定感	変化なし	否定感		肯定的	否定的
SGHの様々な取組に初めて関わった時点と現在で、SGH事業に対する意識に変化はありましたか。	11名	23名	3名		78.6% ※変化なしを除く	21.4% ※変化なしを除く

○ 教職員の意識について考察する時、SGH事業が本校の教育活動に役立っているというのは全員が一致した見解である。しかし、それが教職員にどのような影響を与えているかについては、その意識はさまざまある。ただし、教科のSGH化を目指し、生徒に身に付けさせたい資質・能力を意識した授業改善が進む中、8割近い教職員が、自身の授業改善に多少なりともつながっていると回答していることは、意義あることと考える。

○ それまで関わったことのなかったSGH事業に実際に関わってみて、肯定感が高まったと回答した教職員が約8割となっている。多くの教職員が、SGH事業での生徒の変容を目の当たりにして、そこに肯定的な意義を見いだした結果であると捉える。

(以下、教職員アンケート自由記述欄より、抜粋)

- ・「生徒の情報収集・活用能力や分析力、批判的思考力を育てる中で、教員として、自分自身の中でも進歩や

成長があったと感じています。はじめのうちは調べて発表するだけでも感心したりしていましたが、ここ数年、生徒や教員の中にある、「それで社会がどう変わるのか」というモヤモヤ感は、SGH以降の本校での引き続きの取組や生徒が卒業した後の「ブレイクスルー」へと発展していくことは疑いありません。」

- ・「学校や自分に自信を持てる生徒が増えました。少人数のグループで活動し認められる経験や考えを出し合う経験は貴重なものだと思います。昨年のSGH発表会で、東京から来校した高校の先生の質問に対して、生徒自身が自信を持って返答していた姿を見ることができ、生徒自身が自分の学校について語れる学校を作っていくことが教員の仕事なのだという新しい視点を持ちました。」

#### (5) 学校における他の要素の変化について (授業, 保護者等)

##### I 授業改善について

【平成 28 年 9 月 30 日, 文部科学省から出された本校のSGH事業に対する中間評価】 (抜粋)

今後は、授業での日常的な学習と本事業での様々な取組との有機的な関連をもっと意識することで、生徒の学力向上や意欲向上、あるいはより大きな自信に繋がる取組になることが期待される。

- 平成 28 年度後半以降, 上記のとおり, SGH中間評価で指摘を受けた各教科とSGHとの有機的な関連を深めるため、『教科のSGH化』と銘打って、課題研究を通じて培った「情報収集・活用力」, 「論理的思考力」, 「問題発見力」, 「意見交換・調整力」, 「批判的思考力」等を各教科の授業で活用し、生徒の学力向上と「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる研究を進めた。
- 平成 28 年度から平成 29 年度にかけ, SGHルーブリックを本格的に整備し, 次の4つの視点で活用した。
  - ① 生徒が学習に対して見通しをもって、主体的に取り組むために活用する。
  - ② 生徒が学習活動を振り返って、身に付いた力を自己評価・相互評価するために活用する。
  - ③ SGHの各プログラムについて、取組の成果と課題を考察する際の評価基準とする。
  - ④ 教科のSGH化を進める際に、学習活動の評価基準例として活用する。
 このうち、特に④については、英語科や数学科などが相次いで、SGHルーブリック(キールーブリック)を下敷きにした教科ルーブリックを作成し、授業や教科の研究発表会などに活用している。
- こういった動きに関して、平成 29 年 10 月 19 日(木)に開催した平成 29 年度第 1 回運営指導委員会においては、委員から「今回、SGHで培った力を授業の中で活用し、さらに育てていく中で、生徒の資質・能力を向上させていこうという方向性については、大いに賛成である。実際に生徒の様子を見せていただき、生徒が自分で問題を作成したり、既習のテーマを相手に説明したりする課題に対して、生徒は全力で取り組む中で、彼らの持っている知識が生きて働いている感があった。」などの評価をいただいた。
- その後も、校内における授業改善の取組が継続され、平成 29 年度には全教員の 84%が公開授業を実施し、平成 30 年度も 2 月 15 日現在で 78%の教職員が公開授業を実施し終えるなど、授業改善に向けた校内体制が着実に構築されている。

##### II 家庭・保護者の変化

◆グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標 (アウトプット, 抜粋)

項目	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
帰国・外国人生徒の受入者数(留学生も含む)	0人	1人	1人	1人	1人	5人

- 「帰国・外国人生徒の受入者数」について、今年度は5名に急増した。これは、文部科学省がすすめるアジア高校生架け橋プロジェクトに際して、2名の高校生を受け入れたことが一つの要因である。1学年2クラス80名程度の小規模校であるが、受入れに際しては6つの家庭が希望した。平成 28 年度のイオンワンパーセントクラブ「ティーンエイジアンバサダー」事業のミャンマー相互訪問の際には、16 の家庭がミャンマーの高校生をホームステイさせ、平成 29 年度、姉妹校であるアメリカボッセル高校の生徒の来日の際にも、9名の来校に対して18の家庭がホームステイを受け入れることを希望した。生徒のみならず、保護者

の間にも国際交流の意識が確実に高まっている。

### Ⅲ 地域の印象

◆平成30年度学校説明会参加者アンケート結果（平成30年9月22日）

	本校のどこに興味・関心があるか								
	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ
	中高一貫	国際理解	確かな学力	進路実績	異学年交流	部活動	施設	寄宿舎	その他
回答数	91人	82人	66人	17人	31人	18人	7人	11人	5人
回答率	27.7%	25.0%	20.1%	5.2%	9.5%	5.5%	2.1%	3.4%	1.5%

- 昨年9月に実施した学校説明会の際の参加者アンケートの結果によると、参加者の25%が、本校に対する最大の興味・関心は「国際理解」と回答した。平成29年度と同項目は22.7%（順位は1位）であり、SGH指定校であることが浸透する中、着実に本校の目指す教育方針が地域に受け入れられている印象を持っている。

#### (6) 課題や問題点について

##### I 担当者の過度な負担

◆SGHに関する教職員アンケート（平成31年2月6日、全教職員37名回答）

質 問 事 項	次第に構築	変化なし	次第に衰退	わからない	肯定的	否定的
SGH事業が年を重ねていく中で、協力体制に変化はありましたか。	11名	9名	2名	15名	84.6%	15.4%
質 問 事 項	是非継続	継続も可	継続に疑問	やめるべき	肯定的	否定的
SGHに近い取組を、今後も継続していくべきと考えますか。 ※無回答者2名	14名	18名	3名	0名	91.4%	8.6%

- 教職員アンケートからは、前述のとおり、SGH事業が本校の生徒にとって大変意義ある取組であるという点での一致は見て取れる。しかし、同様の取組を今後も継続していくべきかについては、それに疑問を持つ教職員も若干存在する。その最大の理由が、担当教員の負担が大きすぎるという点である。

（以下、教職員アンケート自由記述欄から抜粋）

- ・「一部の先生に仕事が偏っていることが気になります。その先生がいなくなった時に継続できるかが疑問です。先生方の入れ替わりも激しいので、事業の継続も難しくなっていると思います。行事や指定事業が多すぎて、生徒も教員も手が回らない状態になっており、研究内容が浅くなりがちなこと残念です。」
  - ・「確かに生徒にとっては良いと思います。異文化理解等についても素晴らしい活動になったと思います。その分、（担当）教員の負担は相当なものだと思います。その負担を考えてもやめるべきかどうか悩みます。」
  - ・「担当の先生の負担が大きすぎます。年が進むにつれて生徒も我々も慣れてきますが、その陰にある仕事量は計り知れません。少人数だから充実したSGHができる半面、仕事量を考えると…といった思いがずっとあります。」
- 本校における生徒の課題研究のアドバイザーについては、校長以下全教職員が担当している。事業を進めていく上で、可能な限り全員で事業を支え、他人事として捉えない工夫をしている。また、SGH推進委員会を組織して、役割を分担しながら事業をすすめてもいる。さらには、上のアンケートにも見られるよう、教職員の協力体制も次第に構築されている。しかしながら、現実問題として、どうしても担当教員に過度な負担がかかる現状は否めない。教育現場における今日的課題である“働き方改革”とも併せて、よりよい在り方を模索していく必要がある。

##### II 成果の継承と発展

- 上の教職員アンケートの「年を重ねる中での協力体制の変化の有無」に対する回答で、「わからない」が最多であり、全体の4割を超えている背景についてである。本校の教職員の平均在職期間は4.2年である(平成30年度、管理職は除く)。これは他校に比べても相当短いもので、5年前に本校でSGH事業が開始された際の経緯や当時の状況を知る教職員は回答者37名中11名(29.7%)である。すなわち現在の教職員の約7割は、本校に赴任した時にはすでにSGH事業が存在していたことになる。特にここ3年間の赴任者は、21名(56.8%)であり、SGH事業がある程度軌道にのった以降しか知らない教員が6割近いというのが現状である。「わからない」という回答が最多となった背景には教職員の在職期間の短さがあり、SGH事業の財産をどのようにして次世代に継承し、発展させていくのかも、本校の大きな課題となっている。

#### (7) 今後の持続可能性について

##### I 課題研究の継続

- SGH事業が終了後も、課題研究は継続する。そこには新たな視点として、“地域との協働”が加わる。現在、文部科学省が進める「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の研究指定校を目指しているが、指定の如何に関わらず、すでに立ち上がったコンソーシアムを活用して、地域の教育力を活用し、地域と協働しながら、グローバルな視点を持ってコミュニティを支える地域のリーダーの育成するため、課題研究を軸としたカリキュラムを実践していく。

##### II 接続可能なプログラム①～テレビ会議

◆グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標 (アウトプット、抜粋)

項目	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
テレビ会議での海外高校生との意見交換	0校	0校	2校	1校	4校	5校

- 平成29年度からテレビ会議の相手校が増加した。これは、専用のインターネット回線を使った特定の相手校だけでなく、Skypeを活用してより手軽に交流できる新たな相手校ともテレビ会議を行うようになったからである。この試みが普及・拡大していけば、多大な費用をかけた専用回線を使わなくても、テレビ会議と同様な教育的効果が期待できる学習プログラムを実践することが可能である。

##### III 接続可能なプログラム②～イングリッシュキャンプ

- 課題研究のテーマを「食と農業」としていたため、ニセコで農業を通じて実施していたイングリッシュキャンプを地元で開催し、費用を抑えながらの実施も可能であると考ええる。

##### IV 接続可能なプログラム③～海外フィールドワーク

- 同じ形や規模での継続は費用の面からも難しいが、例えばイオンワンパーセントクラブなど民間の事業やユネスコスクールの海外活動、さらには国や北海道が行う国際交流プログラムを活用して、課題研究の一助となる機会をいろいろな場面で設定し、継続は可能であると考ええる。

##### V 接続可能なプログラム④～海外研修

- 従来から継続している5回生での海外研修については、本校の国際理解教育プログラムの大きな柱となっており、本校が生徒に身に付けさせたい資質・能力を考える上でも、その教育的効果は非常に大きいと考える。今後とも、是非継続してまいりたい。

#### 【担当者】

担当課	学校教育局高校教育課普通教育指導グループ	TEL	011-204-5764
氏名	古御堂 徹	FAX	011-232-1108
職名	主査	e-mail	Furumidou.tooru@pref.hokkaido.lg.jp